

第1章 秩父市の概要

1 自然・地理

1-1 位置・地勢

秩父市は埼玉県西部の都県境に位置し、北は群馬県、西は長野県、南は山梨県及び東京都に接する。面積は577.83km²で、埼玉県の約15%を占める。

市域のほとんどが秩父多摩甲斐国立公園の区域や武甲・西秩父といった県立自然公園の区域に指定されている。市域の87%が森林で、その面積は埼玉県の森林の40%を占め、自然環境に恵まれた地方都市である。

交通は、東京都心まで60～80km圏内、さいたま市まで50～70km圏内に位置し、県北部の熊谷市から山梨県甲府市に至る一般国道140号と、県南部の人間市から飯能市を経て長野県茅野市に至る一般国道299号が市街地で交差する。

さらに、鉄道は県北東部の羽生市より熊谷市を経て荒川沿いに市内を縦貫し三峰口に至る秩父鉄道線と東京都豊島区池袋より県南部の所沢市、飯能市を経て谷間を抜けて秩父市に至る西武鉄道線（池袋駅～西武秩父駅まで特急で約80分）がある。

埼玉県を形成する地形は、概ね飯能・越生・武蔵嵐山・寄居・児玉を結ぶ八王子構造線と呼ばれる南北方向の断層線によって西部の山地と東部の平野に画され、秩父市は西部の山地に属している。この地域は関東山地の北部、秩父地方を中心とした地域にあたるため、秩父山地と呼ばれている。

秩父市の市・県境は、秩父山地の周縁部にあたり、城峯山(1,038m)、甲武信ヶ岳(2,475m)、雲取山(2,017m)、武甲山(1,304m)などが稜線を形成し連なる。河川はこれら山稜を源とし深いV

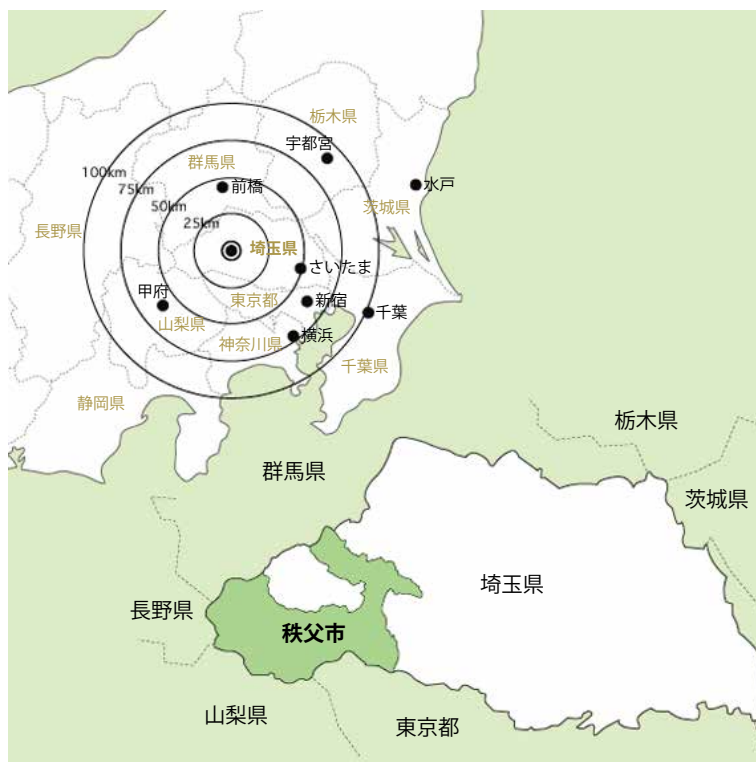


図 1-1 秩父市の位置



※地理院タイル（色別標高図）を加工して作成

図 1-2 地形図

- : 秩父市域
- : 一級河川（指定区間）
- : 上記以外の河川



※秩父市管内図を加工して作成

図 1-3 主要な山岳及び水系図

字谷を形成し、秩父山地を流下して急峻な地形を造る。

代表的な河川の荒川は、甲武信ヶ岳を源流とし、滝川、大洞川、中津川、大血川などの支流とともに大滝地区の山地を東方に流れ、秩父盆地に入り、流れを北方に変え、横瀬川、赤平川と合流し、大里郡寄居町で関東平野に出る。市内には、これら河川の上流部に二瀬ダム、滝沢ダム、浦山ダム、合角ダムなどがあり首都圏の水がめ的一端を担っている。

市の中心部は荒川によって東西に区分され、東部の平坦部分は市街地を形成し、商店街や住宅地が集中している。西部丘陵地帯にある平坦地は水田などの農業用地が多くなっている。さらにその周辺部はほとんどが山林と農地になっている。

1-2 地形・地質

秩父山地（ここでは関東山地北東部をさす）は、古生代・中生代・新生代の多様な地層・岩石が分布し、3億年前のフズリナや1500万年前のパレオパラドキシアをはじめ、さまざまな地質年代の多様な化石を豊富に産する。また、鉱泉・湧水・鉱床・石材など、人々のくらしや産業を支える地下資源が豊富に存在し、ジオストーリー（大地の物語）に恵まれた“地質学の宝庫”である。このため、都心から比較的近い地理的好条件も加わり、秩父地域は、明治時代初期から現在まで多くの地質学者や学生が訪れる場となり、“日本地質学発祥の地”と呼ばれている。

秩父市域は秩父山地のほぼ中央部を占めているが、同市域に限定すると記述が断片的になってしまうため、ここでは秩父山地全体の地形・地質のなかでみていく（図1-4）。



図1-4 秩父山地（関東山地北東部）の地形区分図

1) 秩父山地（関東山地北東部）の地形

秩父山地は、高山とけわしい地形からなる「奥秩父山地」（甲武信ヶ岳 2,475m など）、なだらかな山稜と広い谷底平野で特徴づけられる「上武山地」（城峯山 1,038m など）および「外秩父山地」（堂平山 876m など）、南北約 13km・東西約 15kmの四角形をなす秩父盆地を中心に北西－南東へ延びる細長い谷地形で特徴づけられ国道 299 号が通る「秩父凹地帯」に区分されている。奥秩父山地と上武山地の尾根と谷はほぼ北西－南東にのびているが、外秩父山地の尾根はほぼ南北にのびている。

こうした地形の違いは、地下地質の違いや断層によって区切られた地塊の運動を反映している。秩父山地は新生代第四紀（258 万年前以降）になって形成された。なかでも奥秩父山地はおよそ 10 万年前以降に大きく隆起を開始し、現在もその運動が継続しているため、険しい山岳地形をつくり、相対的に隆起量の小さい上武・外秩父両山地との標高差が生まれた。

甲武信ヶ岳の標高 2,200m 付近を水源とする荒川は、いくつかの支川を合わせながら奥秩父山地を東流し、秩父盆地で北へ向きを変えて幾段もの河成段丘を形成している。そして長瀨で幾度か流路を変転させたのち東へ向きを変え、寄居で関東平野へと流れ出ている。

2) 秩父山地の地質 (地質構造区分・地層・岩石・化石)

秩父山地の地質は、おおよそ北から南へ、三波川帯 (結晶片岩類および御荷鉾緑色岩類)、秩父帯北帯、山中層群 (山中白亜系) および秩父盆地、秩父帯南帯、四万十帯に区分されている。中・古生界からなる地帯はおおよそ北西―南東方向にのびているが、東縁と南縁を断層で限られた秩父盆地はこれらの地帯を切るようにして形成された陥没性の盆地である。奥秩父の甲武信ヶ岳や両神山付近には火成岩の貫入岩体もみられる (図 1-5)。

これらの地形および地質学的情報をもとに秩父地域の地史を要約すると次のようになる。

「3～2.5 億年前 (石炭紀～ペルム紀) に遠い南海の火山島で誕生した緑色岩やサンゴ礁起源の石灰岩は海洋プレートに乗って北進し、2.5～2 億年前 (三畳紀) には古太平洋の深海底に放散虫の遺骸が沈殿してチャートや珩質頁岩ができた。これら海洋起源の岩石は、2～1.5 億年前 (ジュラ紀) には古アジア大陸東縁の海溝に到達し、大陸から河川により運ばれてきた砂や泥の中に大小のブロックとしてとりこまれ、メランジュ (混在岩) となって大陸に付加した (秩父帯の岩石の形成)。1.3 億年前頃になると大陸縁辺の浅海に山中層群 (山中白亜系) が堆積した。海洋プレート上の火山島は大陸下へ沈み込んだが地下浅部にとどまり、弱変成して御荷鉾緑色岩類となった。1 億～8000 万年前頃 (白亜紀後期) にあらたに海溝に到達した海洋起源の岩石はメランジュとなって大陸に付加し (四万十帯の岩石の形成)、一部は海洋プレートとともに大陸下深部まで沈みこみ、7000 万年前頃に高圧下で広域に変成した (三波川帯の結晶片岩類の形成)。約 2000 万年前 (新生代新第三紀) になると、古アジア大陸の東縁地



図 1-5 秩父山地の地質構造区分と地質区の岩相・化石・年代など

帯が大陸から分裂し東方移動して日本海が開き、日本列島の原型がつくられた。秩父地域はほぼその中央部に位置し多島海に浮かぶ島のひとつだった。1700 万年前になると、島の東側に“古秩父湾”と呼ばれる海が入り込み、パレオパラドキシアやクジラをはじめとする多様な生物が棲息し、海底には礫岩・砂岩・泥岩が厚く堆積した（秩父盆地の新第三系の形成）。1500 万年前頃になると古秩父湾の沖合の海底が隆起し、湾が閉じて干上がり、日本列島全体が隆起するにつれて次第に内陸の盆地となっていく。約 260 万年前以降の第四紀になると秩父山地が形を見せて荒川が流れ、50 万年ほど前からは秩父盆地内に幾段もの河成段丘がつくられた（秩父盆地の第四系の形成）。段丘面上には古い八ヶ岳・富士・箱根などの火山から飛来した火山灰が積もって関東ローム層となり、秩父の市街地が広がっていった。秩父山地は現在も隆起を続け、険しい山岳をつくっている。」

3) “日本地質学発祥の地”

○ 日本地質学における先駆的研究

明治 10 年代以降、E. ナウマンをはじめ東大を中心とする地質学者が次々に秩父を訪れ、秩父地域をフィールドとして日本列島の地質に関する先駆的な研究が行われた。秩父山地の地名に由来し全国的に用いられてきた三波川結晶片岩・御荷鉾緑色岩類・秩父古生層などの名称は、明治 20 年（1887）前後に小藤文次郎や大塚専一らの先達により命名されたものである。また、日本地質学の泰斗である東北大学の矢部長克は、大正年間（1912～1926）に発表した論文の冒頭に、「関東山地は日本地質学の揺籃なり」と記している。



図 1-6 横山又次郎（1860-1942）

○ 地質学徒の育成

秩父地域は、東京大学の横山又次郎（図 1-6）をはじめ、石原初太郎・青山長兵衛・神保小虎・小川琢治（湯川秀樹の父）らによる地質

巡検旅行記（日誌）や巡検案内（見学心得・見学要目）が学会誌などに多数掲載され、長瀨には大正 10 年（1921）に秩父礦物植物標本陳列所が建設された。このため、長瀨をはじめ秩父地域は明治期の帝大生や大正期の宮沢賢治をはじめ全国の地質学徒たちの巡検好適地となり、現在に至るまで人気が高い。

○ ジオパークを通じたジオの発信

平成 23 年（2011）には埼玉県内唯一の日本ジオパークとして「ジオパーク秩父」が認定された。地元住民や協力者が秩父の土地と結びついた自然・文化遺産を発掘・再認識し、ジオツアーなどを通じて地域づくりにも貢献しながら、来訪者に秩父のジオ（大地）のすばらしさを発信している。ジオパーク秩父のメインテーマは『大地の守人を育む ジオ学習の聖地』であり、秩父市域はその中核となる位置を占めている。

4) 秩父地域の地形・地質と人々の暮らし・産業等との関わり

低山帯から亜高山帯におよぶ自然豊かな山々に囲まれた秩父地域は、外界と峠を通じてゆるやかにつながる中山間地域として、独自の風土・歴史・文化が形づくられてきた（地域分けについては p.22 の図 1-14 参照）。



図 1-7 秩父ミュージアムパーク展望台から東方、秩父市街地や背後の山々を望む

○ 中央地域

秩父盆地内を曲流する荒川は数段の非対称の河成段丘をつくっている。左岸の尾田蔦丘陵（通称“長尾根”：約 50 万年前の荒川が形成した高位段丘）の上には秩父ミュージアムパーク、右岸の羊山丘陵（約 13 万年前の荒川が形成した中位段丘）の上には羊山公園、聖地公園、幾段もの広い低位段丘群（約 7 万年前～ 1500 年前に荒川が形成）の上には秩父市街地が発展した。「妙見七ツ井戸」「秩父七ツ井戸」「武甲山伏流水」などで知られる段丘崖下の湧水や地下水は、共同洗い場・銭湯・酒造・育苗・生簀・水垢離など人々の暮らし・産業・祭り・信仰などと深く関わり、大きな恵みを与えてきた。「秩父七湯」をはじめ古くから親しまれてきたひなびた温泉宿は、観光客の宿泊と癒しの場となっている。

谷が深く容易に水を得ることができない秩父特有の地形は桑畑の発達をうながし、養蚕を盛んにして秩父銘仙が生まれる要因となった。一方、谷底の浅い蒔田川の水が容易に得られる蒔田地域では水田耕作が盛んとなり、一連の農作業を模擬的に演じる「椋神社御田植祭」が行われている。妙見信仰と石灰石採掘で知られる武甲山では、大正 6 年（1917）に日本最初のセメント工場（浅野セメント）が設立され、石灰石の採掘は、衰退した織物業に代わる秩父の主幹産業として現在も続けられている。

秩父ミュージアムパークの展望台からは、直下に荒川、その向こうに秩父市街地が広がる低位段丘群（黒い帯は段丘崖）、その背後の水平にのびる黒い帯（秩父夜祭で花火を打ち上げ、最近では芝桜で人気の羊山公園がある羊山丘陵の崖線）が遠望できる。最奥部には秩父盆地の東側を囲む山々が見え、黒山-刈米線と呼ばれる断層を境に、写真右半分の険しい秩父帯の山々（三畳紀の武甲山石灰岩体を含むジュラ紀の付加体）と写真左半分のなだらかな三波川帯の山々（緑色岩や結晶片岩で構成）など、地質を反映した地形の違いが見てとれる（図 1-7）。

三波川帯中に産する緑泥石片岩は「秩父青石」と呼ばれ、加工がしやすく濃緑色の色彩が美しい（高圧変成作用の指標であり俗に“点紋”と呼ばれる曹長石の白い斑状変晶を一面に生じたものが多い）ことから、中世にはもっぱら板碑（板石塔婆）の石材として用いられた。寺尾の「延慶の青石塔婆」や「堀切の青石塔婆」などがある。秩父青石は、近世以降には墓石・庭石・踏み石などに利用された。

小鹿野町にある札所 31 番観音院には、日本一の大きさを誇る一本づくりの石造仁王像が建立されている。その石材は背後の観音山と大石山から切り出された「岩殿沢石」である。岩殿沢石は約 1600 万年前の古秩父湾の海底に堆積した凝灰質砂岩で、粘りがあり加工しやすいことから、江戸時代から秩父地方を中心に石垣・階段などの建材や石仏・墓石・供養塔などの石造物の石材として広く用いられた。この石を運ぶとご利益があるとされ「功德石」とも呼ばれた。札所 4 番金昌寺の「慈母観音像」や境内の石仏群などは、岩殿沢石に彫刻を施したものである。

○ 吉田・大田地域

城峯山南面の急傾斜地に巨礫の石垣文化と岩陰遺跡が息づき、秩父事件蜂起の拠点となった。石間や阿熊の集落では、秩父帯北帯のチャート・石灰岩・砂岩・緑色岩などの巨礫を積んだ石垣が特色ある景観を見せている(図1-8)。このうちチャートや砂岩は硬く緻密で風化に強いため「真石」と呼ばれて石垣や漬物石などに利用されてきた。白石山(毘沙門山)の石灰岩地を浸透した湧水はミネラルウォーターとして製品化されている。2本の小河川に囲まれ水が容易に得られる大田地域では水田耕作が営まれ、古代の条里遺構(太田条里遺跡)が発見・発掘されている。



図1-8 巨礫を積んだ石垣(石間集落)
スケールは1m 最大礫径1.5m以上

○ 大滝・荒川地域

秩父山地の主脈を背後にいだく山間の厳しい環境のなかで、林業を中心とした生業が営まれる一方、荒川最上流域の古期堆積岩類が浸食され美しい山巒と鬱蒼とした天然林が醸し出す深山幽谷の世界は、独特の山岳信仰や民俗芸能を生み出した。秩父三山と呼ばれる三峰山・両神山・武甲山は霊峰として信仰と修験道の場となり、人々が暮らす里では「御殿ざさら」と言われる「日向の獅子舞」や山の神を祀る「白久のテングウ祭り」などが現在に伝えられている。荒川上流の中津川では峡谷地形を利用した鉄砲堰を築いて木材を搬出し、急峻なV字谷に生じた大規模な破碎帯地すべりにより緩斜面となった栃本地域では、「秩父往還」に関所が設けられ、付近の集落では“逆さ掘り”と呼ばれる独特の農法が生まれた。

明和年間(1764～1772)の平賀源内による石綿・金・鉄などの探索に始まる中津川の秩父鉱山は140種類もの鉱物を産出することで知られ、明治時代末期から昭和時代初期の柳瀬貞三らによる金・鉄の採掘をへて、日釜鉱業株式会社により金・銀・銅・鉛・亜鉛・鉄・マンガン等の採掘が行われた。最盛期の昭和40年(1965)頃には小倉沢の鉱山町に2千数百人もの人々がくらしていた。その後、非金属の珪石(セラミックスの原料)と結晶質石灰岩(建材・塗料・農薬等の原料)の採掘をへて、現在では結晶質石灰岩のみを採掘している。荒川日野周辺には、秩父帯南帯の赤紫色の凝灰岩(緑色岩)の中に白い石灰岩が礫状に含まれる岩石がみられる。その模様が龍の目を連想させることから「日野龍眼石」と呼ばれ、庭石などに珍重されてきた。

表1-1 年間平均気温(単位:℃)
年間積算降水量(単位:mm)

年	平均気温	積算降水量
平成12年(2000)	13.5	1,128.0
平成13年(2001)	13.0	1,690.0
平成14年(2002)	13.3	1,464.0
平成15年(2003)	12.9	1,165.5
平成16年(2004)	14.0	1,339.0
平成17年(2005)	13.0	1,252.0
平成18年(2006)	13.4	1,447.5
平成19年(2007)	13.7	1,242.5
平成20年(2008)	13.3	1,327.0
平成21年(2009)	13.5	1,166.0
平成22年(2010)	13.8	1,369.5
平成23年(2011)	13.3	1,469.5
平成24年(2012)	13.1	1,219.5
平成25年(2013)	13.8	1,370.5
平成26年(2014)	13.2	1,578.5
平成27年(2015)	14.1	1,425.5
平成28年(2016)	14.0	1,353.0
平成29年(2017)	13.4	1,373.5
平成30年(2018)	14.5	1,319.0
令和元年(2019)	14.1	1,865.5
平均	13.5	1,378.3

【出典：気象庁】

1-3 気候

埼玉県は太平洋側の気候帯に属しており、大部分は内陸性だが、山地である秩父市では盆地型の気候や山岳気候が現れている。夏には雷雨が多く発生し、直近20年で降水量が最も多い月は9月(平均積算降水量224.1mm)である。気温は平地に比べ2～4℃位低く、標高が100m高くなるごとに0.6℃位ずつ低くなり、秩父市役所(標高233m)と

月	平均気温	平均最高気温	平均最低気温
1月	1.7	15.1	-7.8
2月	2.9	19.0	-7.1
3月	6.7	22.2	-4.5
4月	12.3	27.8	-0.8
5月	17.5	31.5	5.1
6月	20.9	31.6	10.6
7月	24.8	36.4	17.4
8月	25.6	36.7	17.5
9月	21.6	33.6	11.7
10月	15.6	28.5	4.7
11月	3.9	17.8	-5.8
12月	13.5	26.9	3.3

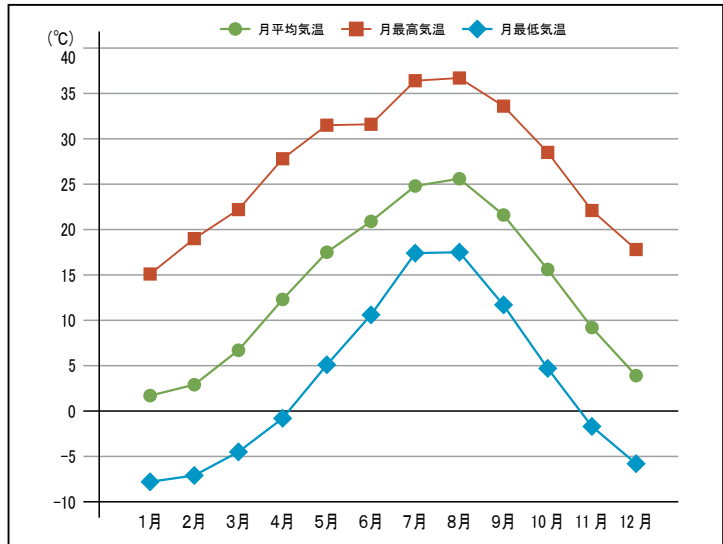


表 1-2・図 1-9 月別平均気温・平均最高気温・平均最低気温（単位：℃）

月	平均最大降水量	平均積算降水量
1月	23.0	38.2
2月	14.1	30.7
3月	23.8	65.2
4月	34.0	82.0
5月	38.1	107.8
6月	48.3	146.1
7月	79.0	196.0
8月	66.6	174.2
9月	89.5	224.1
10月	98.5	222.5
11月	23.2	52.4
12月	21.7	39.2

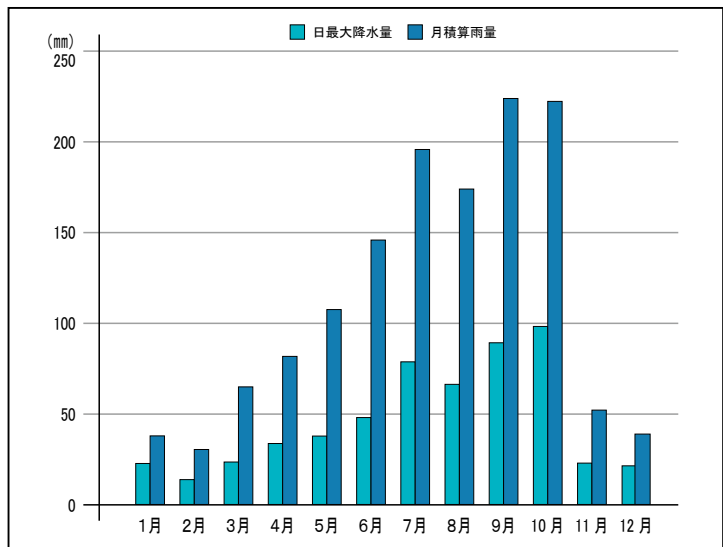


表 1-3・図 1-10 月別平均日最大降水量・平均積算降水量（単位：mm）

【出典：気象庁、※統計期間は平成 12 年（2000）～令和元年（2019）とする。】

みつみねじんじや

三峯神社（標高 1,100 m）では 5℃位の差がある。

夏は日中の気温がかなり高くなり、平均最高気温は 8 月で 36.7℃を記録する。一方、冬の期間は特に夜間から朝方にかけて冷え込みが強くなり、山地ではかなりの積雪となる。平均最低気温は 1 月で -7.8℃を記録するなど、年間を通して気温較差の大きい地域であるといえる。

また、10 月から 11 月にかけて、3～4 日に 1 日位の割合で朝霧が発生すること、年間の平均風速が 1.2m/s と弱いこと、年間平均快晴日数が 68 日と多いことなどが秩父市の気候の特徴として挙げられる。

1-4 生態系

1) 動物

秩父市内には低山帯から亜高山帯まで 2,000 m 以上の標高差が見られ、耕作地や河川敷、雑木林といった里山的環境、県内で唯一の亜高山帯、それを中心とした自然林、石灰岩地や鍾乳洞など、特有な自然環境を有している。それぞれの環境に合わせて様々な動物種が生息しており、県内でも確認されている動物種数は比較的多様である。特に石灰岩地域や山地、亜高山帯に生息する種では発見記録の限られた

希少種や絶滅が危惧される種なども確認されている。

市内の大きな割合を占める山地や亜高山帯には、国指定特別天然記念物カモシカやツキノワグマをはじめとした大～中型哺乳類や、国指定天然記念物ヤマネやニホンモモンガなどの希少な小型哺乳類が生息する。またコウモリ類が豊富で、低山帯から亜高山帯にかけて16種が記録され、山林内の樹洞や鍾乳洞、採鉱跡は重要な生息地となっている。

動物の中で最も種数の多い昆虫類では、確実な生息地が橋立鍾乳洞のみとされるバツタの仲間クロイシカワカマドウマをはじめ、全国的にも生息地の限られる種や県内でも亜高山帯にのみ記録のある種などが散見される。

また、落葉樹林の湿潤な林床部では、埼玉県固有亜種のチチブギセルや石灰岩地域を好むヤグラギセルなどの生息地の限られた陸産貝類が多く記録されている。

2) 絶滅が危惧される種、希少種

「埼玉県レッドデータブック動物編2018」に掲載される動物種は842種であり、このうち120種近くは山地帯、亜高山帯を中心に生息が確認されている種である。埼玉県の山地、亜高山帯の大部分は秩父市内にあり、これらの絶滅危惧種は秩父市が生息地の中心ともいえる。また、これに低山帯の種を含めると秩父市に生息する絶滅危惧種の数はいくらも増大する。これらの絶滅危惧種の中には、上述の国指定天然記念物ヤマネや埼玉県固有亜種のチチブギセル、クロイシカワカマドウマなどの希少種も含まれ、各動物種にとって秩父市は県内でも重要な生息地域になっていることがうかがえる。

3) 植生

秩父市の海拔の低い丘陵地とその周辺では、コナラ、アカマツ等の二次林やスギ、ヒノキの植林などの里山の森林景観が広がっており、一部に小面積のウラジロガシやアラカシなどの暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の自然林が残されている。

盆地の下部から海拔約600m位までの範囲には、中間温帯林が成立する。主な樹種は、針葉樹のモミヤクリ、コナラ、シデ類などの落葉広葉樹である。冷温帯植生は、海拔約600mから1,600m位に成立する。ブナをはじめイヌブナ、ミズナラなどの樹林が見られる。谷沿いには、シオジ、サワグルミ等の見事な溪畔林が成立するところがある。山岳上部の海拔1,600m付近から亜高山帯となり、コメツガ、シラビソ、オオシラビソ等の針葉樹林を主とする森林が分布する。

4) 希少な植物

秩父市に分布する植物のうち、絶滅のおそれのある種をまとめたレッドリスト(「埼玉県レッドデータブック2011植物編」「環境省レッドリスト2019」)の掲載種は秩父市では492種となり、県レッドリストが489種、環境省レッドリストのみが3種である。県レッドリストの489種は、埼玉県全体の764種の実に64%に上り、秩父市は希少性の高い植物が多数分布している。

秩父市の希少な植物の特性として、亜高山の植物、石灰岩地帯の植物、その他の岩地の植物、地域文化の形成に関わる植物(早春の美しい草本など)及び県内で秩父市に分布が限られる種が挙げられる。

5) 希少な植物群落

希少な植物群落について、「埼玉県レッドデータブック2011植物編」、財団法人日本自然保護協会:「植物群落レッドデータブック」(1996)、環境省特定植物群落等を主体にまとめると、秩父市内には107群落が該当する。各植生帯を代表する森林群落や山地草原、石灰岩等植物群落、路傍・林縁群落などで、

市内で保全すべき主要な植物群落をほぼ網羅している。これらのうち、県文化財が3群落、市文化財が3群落、埼玉県希少野生動植物種が1群落及び県自然環境保全地域の4群落が含まれる。

6) 巨木・名木

巨木とは、平成元年（1988）に環境庁が初めて全国規模での巨樹・巨木林調査を行った際、「地上から130cmの位置で幹周（幹の円周）が300cm以上の樹木を対象とする」と定め、現在ではこれが一般的な定義となっている。また、名木とは、由緒のある名高い樹木を指す。

既往調査によると、秩父市内では現状で86件の巨木・名木がある。樹種は39種と多様であり、ケヤキ（11件）が最も多く次いでエドヒガン（9件）、スギ（6件）、ブナ（4件）などである。

これらは、地域の森林・樹木の象徴的存在であり、良好な景観の形成やシンボルとして人々の心のよりどころとなり文化的価値も高く、将来にわたって保全すべきものとして重要である。

7) 森林の利用

秩父市では、区域面積の57,783haのうち森林面積は50,204haで、森林率は87%に上る。うち民有林は全体の約76%で、国有林が約24%の面積を占める。

これらの森林では、丘陵地の雑木林や山間地の人工林、奥地の原生林など多種多様な森林が古くから人々の生活や利用に深く関わってきている。

里山のコナラ林等の落葉広葉樹二次林はかつては薪炭生産に大きな役割をしていたが、近年では多くが利用されていない状況にある。戦後からスギ、ヒノキを主に植林が進み、市の民有林の人工林率は44%となっている。最近は人工林の間伐の促進と木材利用の拡大が課題である。

文化財建造物に利用される資材として木材、^{ひわだ}檜皮などが必要であるが、これらのモデル供給林及び研修林となる「ふるさと文化財の森」が、秩父市有林及び東京大学秩父演習林に設定されている。

特産林産物では、しいたけ（生、乾）、なめこ、木炭、山菜等が生産されている。また、森林所有者等により広葉樹のカエデ樹液やキハダ樹皮等を利用した商品開発が行われている。

1-5 景観

秩父市は、シンボルとしてそびえる「武甲山」や秩父山地などの山と、その山地を水源とする荒川を中心に川が織りなす自然に恵まれた景観が特徴である。そして、その恵まれた自然環境を背景に、広大な市域内に市街地や田園、農山村といった様々な地域を有し、その一つひとつが異なった、特色ある景



図 1-11 「秩父市本町・中町景観形成重点地区計画」区域に定められている本町通り



図 1-12 栃本集落



図 1-13 中津峡

観を形成している。さらに、市内各所には秩父神社ちちぶじんじやや秩父札所を始めとする神社仏閣や、秩父往還等の街道沿いに形成された宿場町、近現代の織物産業やセメント産業の名残が残る建物といった、歴史的景観が残されている。

なお、自然景観のうち、「中津峡」が県、「城峯山」、「子ノ神の滝ねかみ」が市の名勝指定を受けている。

2 自治体の沿革

2-1 地名

1) 「知知夫」について

古代、「チチブ」は漢字の音を借りた表音表記で「知知夫」と表されていた。しかし、「チチブ」の語源は不明、様々な説がある。

- 『先代旧事本紀』せんだいくじほんぎ 『國造本紀』こくぞうほんぎ 成立：延喜年間（901～923）頃

（読み下し文）

みずがきのみかど みよ やごころおもいかねのみこと ちちぶひこのみこと くにのみやつこ たも おおかみ おが まつ
「瑞籬朝の御世、八意思兼命の十世の孫、知知夫彦命 國造に定め賜う。大神を拜み（き） 祠れ。」
（崇神 すじん） （おおみわ） （いつき）

- 『高橋氏文』たかはしのうじぶみ 延暦8年（789）に記
「知々夫國造上祖 天上腹・天下腹人…」
「武蔵國知々夫大伴部之（上）祖、…」

- 『和名類聚抄』わみょうるいじゆうしょう 承平年間（931～938）に記（源順みなもとのしたごう 撰）
「武蔵國 秩父 知知夫」

2) 「秩父」について

和銅6年（713）、郡郷名に好字（二字）を用いることになり「知知夫」から「秩父」と表記される。

- 『続日本紀』しよくにほんぎ 卷四 延暦16年（797）完成
「和銅元年（708）武蔵國秩父郡献和銅…」
- 『延喜式』卷第二十二 民部上 延長5年（927）完成奏上
東海道
（中略）
武蔵國大管（中略）秩父チチブ
（中略）
右為遠国
（中略）
凡諸國部内郡里等名。並用二字。必取嘉名。
（凡そ諸國部内の郡里等の名は、並びに二字を用い、必ず嘉名を取れ。）
- 『万葉集』 勝宝7年（755）、諸国防人歌84首（武蔵国の防人の歌は20首） 万葉集20-4114

おほきみの 美ことかしくみ うつくしけ まこがてはなり しまづたひゆく
 於保伎美乃 美己等可之古美 宇都久之氣 麻古我豆波奈利 之末豆多比由久
 (大君の 命恐み 愛しけ 真子が手離り 島伝ひ行く)
みぎのいっしゅすけのよぼろちぢぶのこほりのおおともべのをとし
 右一首 助丁秩父郡大伴部小歳

・駒牽

「秩父御馬貢進（駒牽）、宇多院供馬。」

秩父御馬駒牽の記事は、延喜3年（903）以後約180年文献上で確認。『政事要略』他

3) 近世から現代までの沿革

近世から現代までの秩父市の沿革を図1-15にまとめた。

明治22年（1889）頃の秩父市は、大宮町・原谷村・尾田蒔村・高篠村・大田村・上吉田村・下吉田村・中川村・白川村・大滝村となった。その後、昭和3年（1928）に、上吉田村と下吉田村が合併して吉田町が誕生した。続いて昭和25年（1950）、市制施行にともなって大宮町から県下7番目の市となった秩父市は、昭和の大合併が行われた昭和29年（1954）から昭和33年（1958）にかけて、原谷村・尾田蒔村・久那村・高篠村・太田村・影森町の1町5村と合併した。

一方で、昭和時代に入ってから大滝村・荒川村には特にそうした動きはなく、現在の秩父市域は秩父市・吉田町・大滝村・荒川村の1市1町2村に分かれた状態となった。

これが現在の形になるのは、その約50年後の「平成の大合併」が行われた平成17年（2005）である。

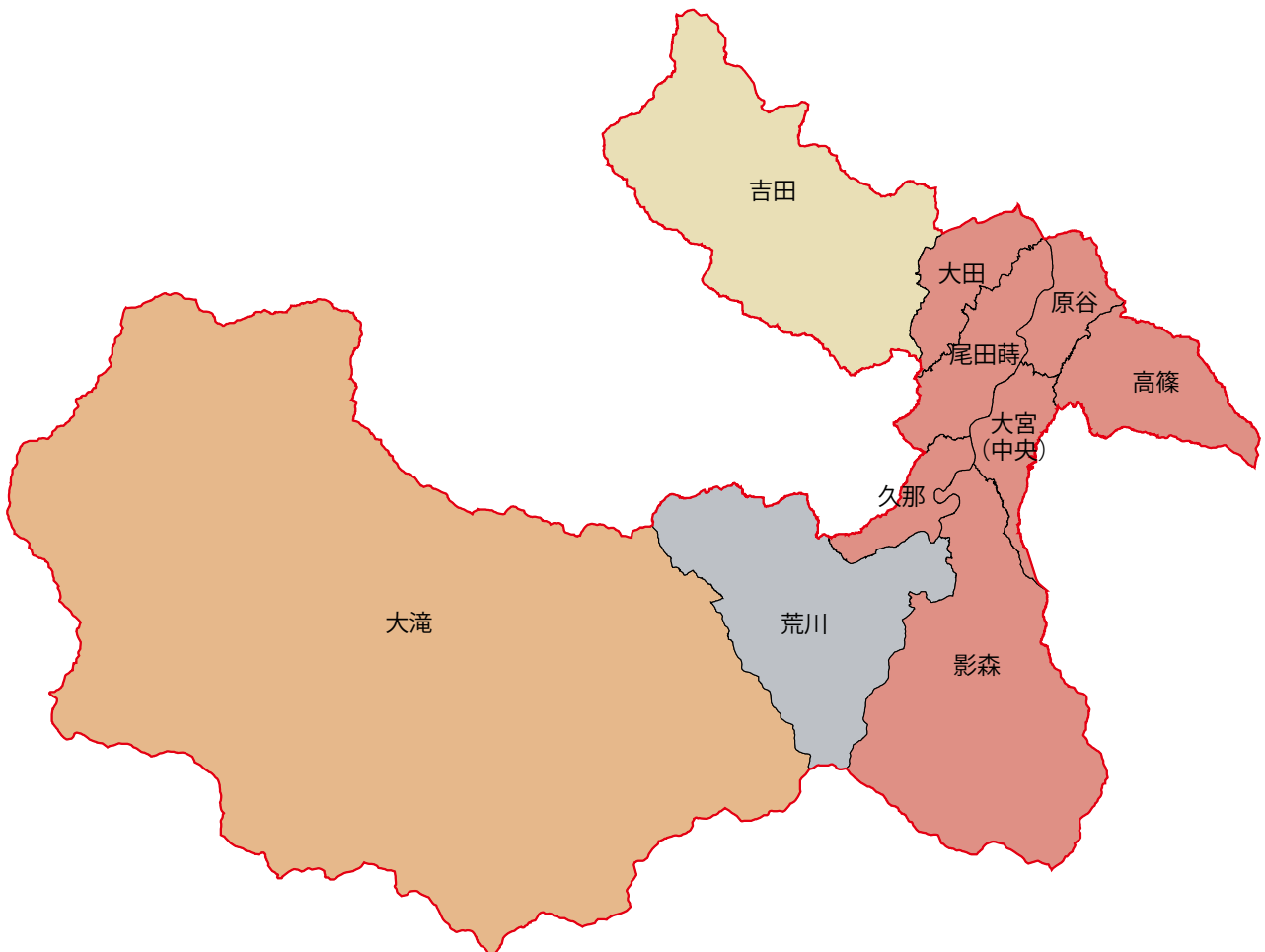


図1-14 現在の地域区分図

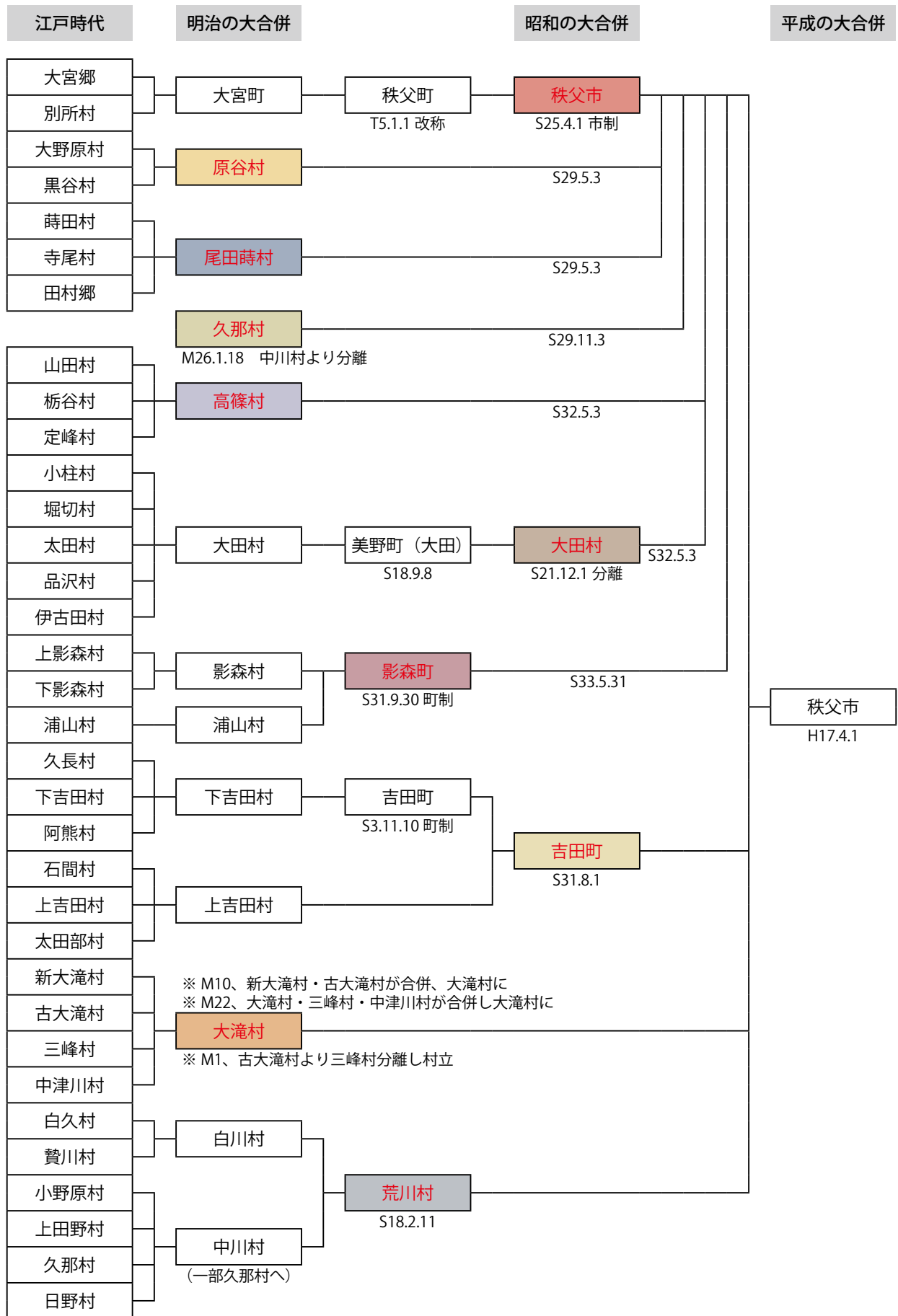


図 1-15 秩父市沿革図

表 1-4 現在の秩父市の地名

地域名	地区名	(大字)	ヨミ
中央	中央 (大宮)	阿保町	アボマチ
		柳田町	ヤナギダマチ
		金室町	カナムロマチ
		永田町	ナガタマチ
		大畑町	オオバタケマチ
		滝の上町	タキノウエマチ
		相生町	アイオイチョウ
		桜木町	サクラギマチ
		中村町	ナカムラマチ
		近戸町	チカトマチ
		上町	カミマチ
		中町	ナカマチ
		本町	モトマチ
		道生町	ドウジョウマチ
		宮側町	ミヤカワチョウ
		番場町	バンバマチ
		東町	ヒガシマチ
		上宮地町	カミミヤジマチ
		中宮地町	ナカミヤジマチ
		下宮地町	シモミヤジマチ
	上野町	ウエノマチ	
	熊木町	クマギマチ	
	野坂町	ノサカマチ	
	日野田町	ヒノダマチ	
	大宮	オオミヤ	
	別所	ベッショ	
	原谷	大野原	オオノハラ
		黒谷	クロヤ
	尾田蒔	蒔田	マイタ
		寺尾	テラオ
		田村	タムラ
	高篠	山田	ヤマダ
		栃谷	トチヤ
		定峰	サダミネ
	久那	久那	クナ
	影森	上影森	カミカゲモリ
下影森		シモカゲモリ	
和泉町		イズミチョウ	
浦山	浦山	ウラヤマ	

地域名	地区名	(大字)	ヨミ
吉田・大田	下吉田	吉田久長	ヨシダヒサナガ
		下吉田	シモヨシダ
		吉田阿熊	ヨシダアグマ
	上吉田	吉田石間	ヨシダイサマ
		上吉田	カミヨシダ
		吉田太田部	ヨシダオオタブ
	大田	小柱	オバシラ
		堀切	ホリキリ
		太田	オオタ
		品沢	シナザワ
		伊古田	イコタ
		みどりヶ丘	ミドリガオカ

地域名	地区名	(大字)	ヨミ
大滝	大滝	大滝	オオタキ
		中津川	ナカツガワ
		三峰	ミツミネ
荒川	白川	荒川白久	アラカワシロク
		荒川贅川	アラカワニエガワ
	中川	荒川小野原	アラカワオノバラ
		荒川上田野	アラカワカミタノ
		荒川久那	アラカワクナ
		荒川日野	アラカワヒノ

備考

- ・地区名は、明治22年(1889)に存在した町村名である。
- ・現在、秩父市は大字表記をしていないため、大字を(カッコ)書きとした。

2-2 人口動態

秩父市の令和3年（2021）3月1日現在の人口は60,994人である。近年の人口推移をみると、昭和35年（1960）にピークを迎えて以降人口減が続いており、平成7年（1995）以降は減少が加速している。また、将来人口推計グラフを参照すると、今後も人口は減少し、2045年には約41,000人になると予想されている。これは昭和35年（1960）の人口82,811人に対して約半数、平成27年（2015）の人口63,555人に対しても約70%の割合となるもので、それに伴い少子高齢化が更に進んでいくと予想される。なお、上位計画である第2次秩父市総合振興計画では、国立社会保障・人口問題研究所の推計値が

表 1-5 人口推移（単位：人）

年号（西暦）	総人口	中央 (旧秩父市)	内訳								吉田	大滝	荒川
			中央	原谷	尾田蒔	高篠	久那	影森	浦山	大田			
1955	81,663	58,879									9,264	7,059	6,461
1960	82,811	59,796	35,543	4,895	4,065	5,140	1,309	4,721	1,205	2,918	8,556	8,202	6,257
1965	80,543	60,330	36,275	5,170	3,902	5,004	1,149	5,130	980	2,720	7,765	6,449	5,999
1970	78,764	60,867	35,894	5,910	3,876	5,098	1,059	5,731	785	2,514	7,118	4,791	5,988
1975	78,166	61,798									6,830	3,245	6,293
1980	76,875	61,285									6,576	2,713	6,301
1985	76,275	61,013									6,536	2,368	6,358
1990	75,845	60,915									6,388	2,228	6,314
1995	75,618	60,799	29,998	9,549	5,019	5,436	1,329	6,775	250	2,443	6,275	1,857	6,687
2000	73,875	59,790									5,992	1,711	6,382
2005	70,563	57,525	26,604	9,730	5,203	5,446	1,522	6,511	156	2,353	5,618	1,336	6,084
2010	66,955	55,030									5,222	1,013	5,690
2015	63,555	52,850	23,357	9,571	5,043	5,000	1,313	6,292	101	2,173	4,742	788	5,175
2020（予測）	59,731	49,906	21,868	9,221	4,669	4,742	1,254	6,023	88	2,041	4,381	662	4,782
2025（予測）	55,874	46,886	20,377	8,809	4,320	4,477	1,192	5,716	76	1,919	4,038	559	4,391
2030（予測）	52,114	43,888	18,934	8,366	4,005	4,203	1,126	5,395	66	1,793	3,725	474	4,027
2035（予測）	48,450	40,926	17,533	7,883	3,700	3,927	1,056	5,095	56	1,676	3,443	397	3,684
2040（予測）	44,709	37,902	16,168	7,376	3,397	3,651	984	4,733	47	1,546	3,136	331	3,340
2045（予測）	41,075	34,942	14,845	6,853	3,107	3,368	911	4,408	41	1,409	2,836	279	3,018
2015/1965 比	79%	91%	64%	185%	129%	100%	114%	123%	10%	80%	61%	12%	86%
2040/2015 比	70%	72%	69%	77%	67%	73%	75%	75%	47%	71%	66%	42%	65%

【出典：人口／国勢調査、内訳／秩父市誌・政府統計の総合窓口（e-stat）、予測人口／国土技術政策総合研究所】

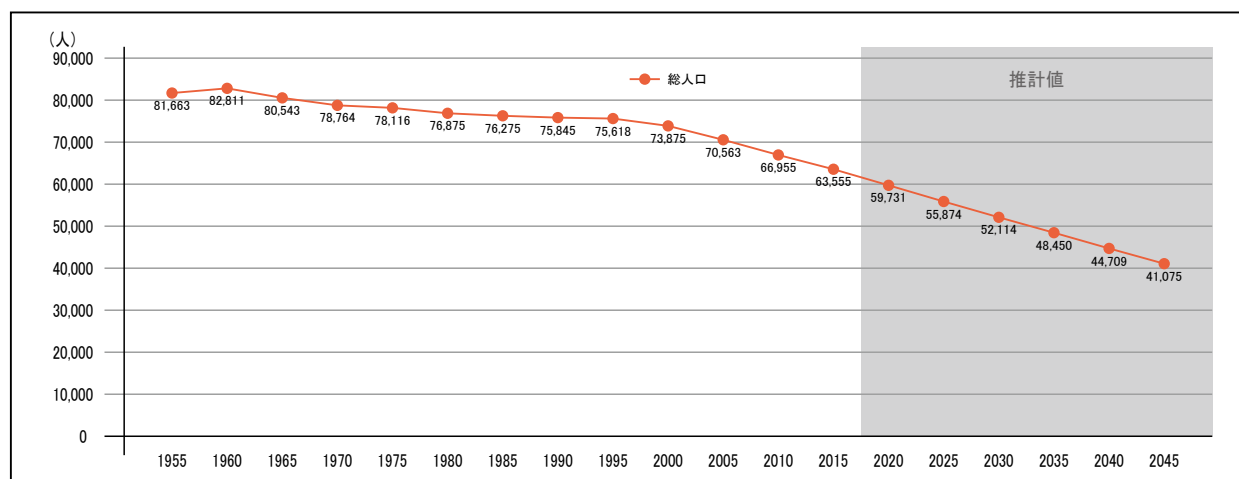


図 1-16 秩父市の総人口の推移（単位：人）

ら、政策効果により出生率を現状の1.3前後から1.5に上昇させ、同水準で推移し、年少から中高年層が毎年一定数転入したと仮定して算出した独自推計を掲載しているが、地域別で試算はしていないため、地域計画ではこのデータは使わず、社人研推計値で試算している。

このような人口の減少と急速な少子高齢化は、既に課題となっている文化財を保存・継承する人口の減少、担い手不足の問題に深刻な影響を及ぼすものと想定される。

2-3 産業

現在の秩父市の主な産業のひとつは観光である。秩父市を訪れる観光客数は年々増加しており、令和元年度には約538万人を数えた。かつては、農業、セメント関連の鉱業が盛んであったが、現在は減少している。

また、現在秩父市が力を入れている産業として、林業が挙げられる。林業の担い手が減少している状況の中、森林認証制度や森林環境税の導入、「栃本市有林200年生の森」事業の推進などを行い、林業の振興を図っている。平成31年（2019）に「ふるさと文化財の森」に認定された「秩父市栃本市有林」については、（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会と檜皮の出荷協定を結び、檜皮採取の研修を現地で行うなど、文化財建造物の保存に関して資材や技能の確保に貢献している。

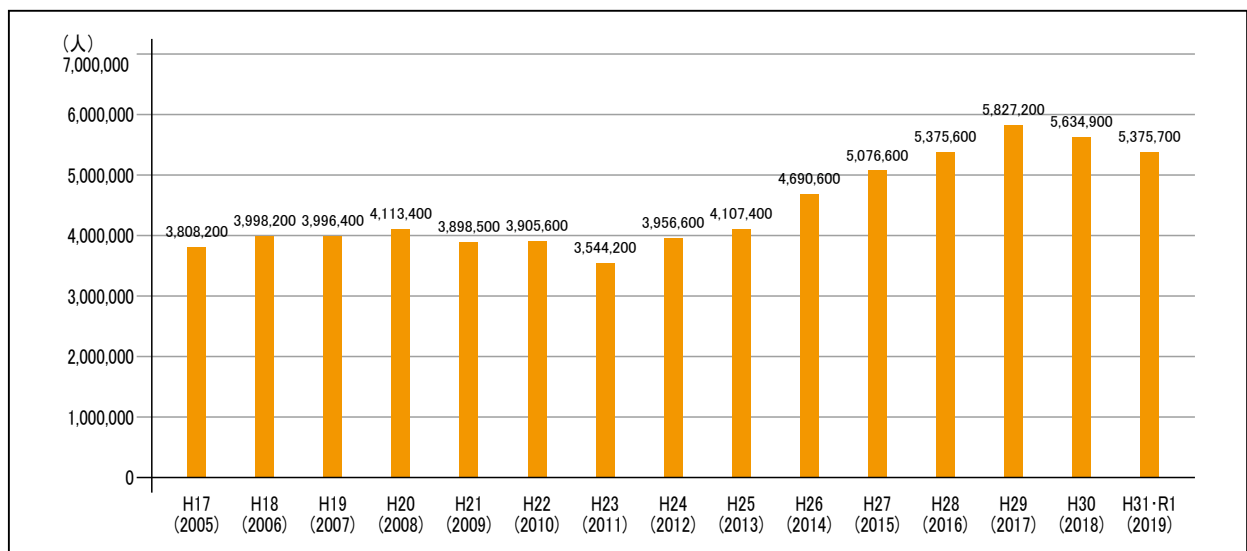


図 1-17 年間入込観光客数

※平成17年（2005）4月1日に秩父市・吉田町・大滝村・荒川村は合併したため、平成17年（2005）1月～3月は旧秩父市の数字、4月～12月分は合併した4市町村の数字は合算となる。

※年間入込観光客数は平成22年（2010）まで埼玉県観光課、入込観光客「推計」調査の数である。平成23年（2011）以降は、市で試算した数である。

表 1-6 産業別就業者数

産業大分類		平成27年（2015）			
		就業者数 (人)	構成比 (%)	合計 (人)	構成比 (%)
第1次産業	A 農業、林業	818	2.8	819	2.8
	(うち農業)	(716)			
	B 漁業	1	0.0		
第2次産業	C 工業、採石業、砂利採取業	122	0.4	9,437	31.8
	D 建設業	2,478	8.4		
	E 製造業	6,837	23.1		

第3次産業	F	電気・ガス・熱供給・水道業	139	0.5	19,402	65.4
	G	情報通信業	143	0.5		
	H	運輸業，郵便業	1,697	5.7		
	I	卸売業，小売業	4,165	14.0		
	J	金融業，保険業	485	1.6		
	K	不動産業，物品賃貸業	268	0.9		
	L	学術研究，専門・技術サービス業	654	2.2		
	M	宿泊業，飲食サービス業	1,949	6.6		
	N	生活関連サービス業，娯楽業	1,344	4.5		
	O	教育，学習支援業	1,423	4.8		
	P	医療，福祉	3,951	13.3		
	Q	複合サービス事業	323	1.1		
	R	サービス業(他に分類されないもの)	1,314	4.4		
	S	公務(他に分類されるものを除く)	996	3.4		
T	分類不能の産業	551	1.9			
合計					29,658	100.0

【出典：国勢調査】

2-4 土地利用

市域は山地が87%を占める。盆地には市街地が広がり、周辺の山地及び谷筋に沿った地域にはそれぞれ集落が発達した。大田地域は特筆すべき場所で、平地であり市内でも珍しく水田として土地を利用してきた。他の地域の農地は畑作が主であり、養蚕が盛んであった時期には桑畑が多く広がっていたが、現在ではその風景はあまり見られなくなっている。

秩父市では、以下の区域を除く市域が都市計画区域として位置づけられている。

【大田地区（太田・小柱・伊古田・堀切・みどりが丘）・定峰・浦山・旧吉田町・旧大滝村・旧荒川村】

2-5 交通

秩父市には古くから熊谷方面から甲州に至る秩父往還が通り、多くの人の往来があった。現在は、主要道路として、熊谷市から山梨県に至る国道140号と、入間市・飯能市から長野県に至る国道299号が市内を通る。平成10年（1998）の大滝地域から山梨県へ抜ける雁坂トンネルの開通や、平成30年（2018）の皆野秩父バイパスの開通、延伸により、自動車による各地からの交通の利便性がより増した。

市内を通る鉄道は、秩父鉄道線と西武鉄道線の2路線である。秩父鉄道線は県北地域、西武鉄道線は飯能・所沢市方面、豊島区池袋方面とをつなぐ路線であり、通勤・通学、また観光の主要な交通手段となっている。特に西武鉄道線は、都心部から横浜方面まで乗り入れを行っており、県外からの観光客の増加の大きな要因となっている。

鉄道及びバスによる公共交通の利用圏（鉄道駅から800m圏域、バス停から300m圏域）は、居住エリアをほぼカバーし、公共交通を利用可能な環境にあるが、鉄道については影森駅～三峰口間の運行本数が1本/時間程度であり、バスについては一定の運行本数がある路線・区間は限られることから、利用しづらいという課題がある。

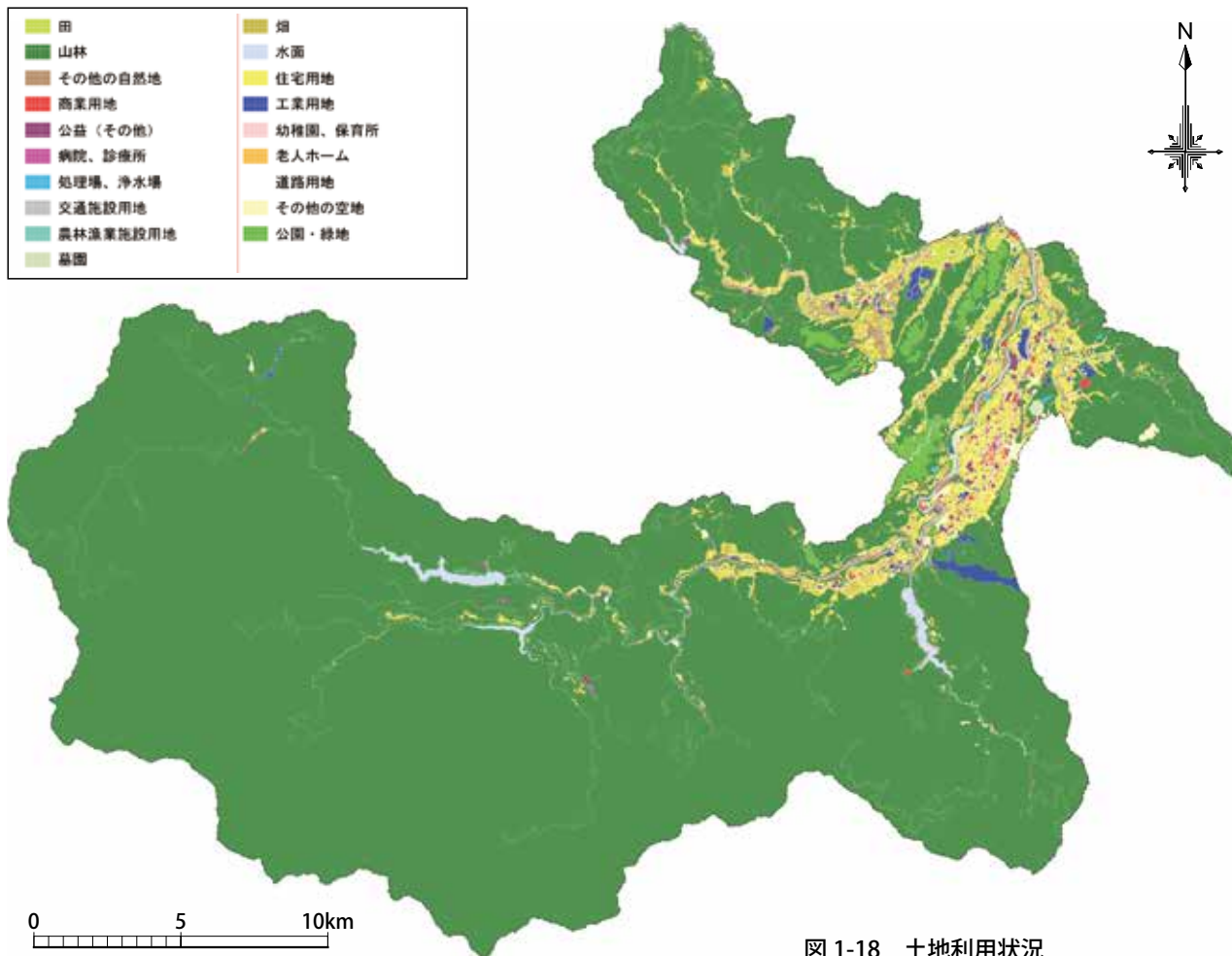


図 1-18 土地利用状況



※秩父市管内図を加工して作成

図 1-19 主要な交通網

3 歴史

3-1 原始

秩父地方の人類の足跡は、近年の発掘調査により、旧石器時代後期の約1万6000年前のナイフ形石器が蒔田にある下蒔田遺跡より出土したことで、確実に遡れることが確認されている。また、約1万2000年前の縄文時代草創期になると、「神庭洞窟」や「岩かげ遺跡」（上影森橋立）より石器類と共に発見された隆起線文土器が出土している。このほか、「彦久保岩陰遺跡」など、山間地域特有の岩陰遺跡が埼玉県秩父地方の遺跡の特徴となっている。

その後、縄文時代中期（約5000～4000年前）以降になると全国的に遺跡の数が増え、市内でも「井の尻遺跡」、県選定重要遺跡「葉山遺跡」、「下段遺跡」、「塚越向山遺跡」など多くの遺跡が確認されている。しかしながら、縄文時代晩期（約3000～2300年前）から弥生時代（約2300～1800年前）にかけて、遺跡数が極めて少なくなる。これは全国的な動向で、秩父市も例外ではない。「大沼遺跡」、「井上遺跡」、「中野遺跡」などが挙げられる。

◆原始における主要な文化財及び関連施設

- ・神庭洞窟、岩かげ遺跡

3-2 古代

古墳時代（3世紀中葉から6世紀末葉）になると、集落跡の遺跡の増加が見られる。秩父市内の古墳は、概ね古墳時代後期・終末期（6世紀前葉から8世紀初頭）にかけての群集墳が多い。代表的なものとして「飯塚・招木古墳群」、「大野原古墳群」、「金室古墳群」、「取方古墳群」、「太田部塚山古墳群」などが確認されている。特に「大野原古墳群」からは、蕨手刀が出土し、県指定有形文化財となっている。

「ちちぶ」の名は、早くから知られており、2-1で記述した『先代旧事本紀』の「國造本紀」によると、秩父地方が東国にあっていち早く国造が任命されたとある。

律令制下の秩父郡は、『和名類聚抄』によると、管内6郷の下郡とされている。郡域は概ね現秩父郡の全域と旧神泉村、寄居町、都幾川村、飯能市の一部を含むものと考えられている。また、太田地内には太田条里遺跡が確認されている。

近年、郡衙や正倉などの関連遺跡が発掘調査で明らかになりつつあるが、秩父郡の郡衙は不明である。中村郷があったとされる秩父市中村町が有力な候補地であるという。

中央政府との関わりは、『続日本紀』（延暦16年（797）成立）の和銅元年（708）戊申正月条によれば、秩父郡より和銅（ニギアカガネ）を献上し、年号が慶雲から和銅に改元され、武蔵

表 1-7 時代区分の定義

＜時代区分の定義＞	
原始	旧石器時代～弥生時代
古代	古墳時代～平安時代前期
中世	平安時代中期（武士の出現）～室町時代
近世	安土・桃山時代（豊織政権）～江戸時代
近代	明治時代～大正時代
現代	昭和時代～

※文部科学省 学習指導要領（高校 / 地理歴史）より



図 1-20 岩かげ遺跡（上影森橋立）



図 1-21 和同開珎

野国の庸調が免じられた。その自然銅が産出された場所は不明であるが、秩父市黒谷地区が有力候補地といわれている。また、「万葉集」巻二十の防人の歌には助丁秩父郡大伴部少歳おおともべのおとしの歌が収録されている。吉田小学校の校庭に万葉歌碑がある。さらに、平城京跡からは、天平 17 年（745）「秩父郡大贄鼓一斗」の木簡が出土している。

10 世紀に編さんされた延喜式には、秩父神社・椋神社が記載されている。また、秩父郡に勅旨牧が 2 か所指定された記述もある。

◆古代における主要な文化財及び関連施設

- ・飯塚・招木古墳群
- ・蕨手刀 付 足金物二点

3-3 中世

平安時代には、馬を飼育する牧の経営などによって培った勢力を背景に、2つの武士団が誕生した。一つは郡名を名乗る平姓秩父氏で、11世紀初頭活躍していた将恒まさつねが「中村太郎、武蔵野国守」と称し、その子である武基たけもとは秩父別当（秩父牧の監督者）を兼ね、その子の武綱たけつなの時に秩父市下吉田に移り県指定史跡「秩父氏館跡」を構えたといわれている。

もう一つの武士団は、平安時代末期頃に平姓秩父氏が秩父郡内から武蔵国各地に拠点を移した後に秩父郡内に勢力を伸ばした丹党中村氏である。丹党中村氏は武蔵七党の一つで、居館は秩父市中村町にあったと考えられており、関連遺跡として、市指定史跡「丹党中村氏の墓」、県指定史跡「延慶の青石塔婆」などがある。

これら武士は信仰にも影響を及ぼした。庇護を受け社寺の創立が盛んであり、秩父観音霊場の成立もこの頃であったといわれている。関係資料として「長享 2 年（1488）秩父札所番付」の古文書が残っている。なお、この番付は江戸時代以降の番付とは大きく違っていた。

応仁の乱を境に幕府の支配体制は揺らぎ、関東では長尾景春が関東管領山内上杉顕定に対抗し、文明 7 年（1475）に武蔵鉢形城はちがたに立て籠もり、翌年 6 月に反乱を起こした。長尾景春は意玄入道いげんにゆうどうと称し、太田道灌の出陣により敗走し、秩父に逃げ込んだ伝説が残っている。

この後、後北条氏ほうじょうしが台頭してくると、秩父地方は鉢形北条氏の支配下となり、土豪もその支配下になっていったと考えられる。高岸家文書たかぎしはじめとする古文書が当時の様子を伝える。秩父地方は隣国の甲斐武田氏たけだしの版図に接しているため、備えの拠点となった城郭が多く残っている。

市内の代表的な城跡には「諏訪城跡すわ」、「竜ヶ谷城跡りゅうがや」、県選定重要遺跡「熊倉城跡くまくら」などがある。永禄 12・13 年（1569・1570）には、甲斐武田軍の秩父侵入が行われ、市内の社寺に対して火をかけられて焼失したという信玄焼きしんげんの伝承が数多く残っている。代表的な例に秩父神社、吉田椋神社、廣見寺などがある。



図 1-22 秩父神社



図 1-23 秩父氏館跡



図 1-24 熊倉城跡

◆中世における主要な文化財及び関連施設

- ・ 妙見信仰
- ・ 秩父神社文書（鎌倉時代末期～）

3-4 近世

豊臣秀吉とよとみひでよしの小田原征伐を受け、天正18年（1590）6月鉢形城の落城、同年7月に本拠地小田原城落城の後、後北条氏の支配を受けていた秩父地方は、関東に入国した徳川家康とくがわいえやすの支配下となる。

鉢形北条氏の旧臣達の多くが秩父地方に落居したと考えられており、江戸期の名主層の多くが、これら旧臣の後裔こうえいであるという。

秩父地方は、当初、直轄地として関東郡代の伊奈氏いなしの支配を受けていた。寛文3年（1663）に忍藩主の阿部忠秋おしほん あべただあきが秩父の大宮郷（秩父市）をはじめ周辺の諸村の領地を幕府より下賜されている。秩父忍藩領は大部分が現秩父市域にあり、時代により変化があるが、荒川右岸地域に集中していた。

忍藩の秩父支配は、現埼玉県地方庁舎の敷地に代官所が置かれ、民政を司った。通常、民の支配は五人組制度のもと、名主、組頭、百姓代の村方三役を通して行っていたが、忍藩はこれら村方を総轄する割役という職を設け、代官と村方の間に介在させた。これの代表的な資料として県指定有形文化財（古文書）「忍藩割役名主御公用日記」がある。



図 1-25 忍藩秩父領代官所跡
（埼玉県秩父地方庁舎）

おしほんわりやくなぬしごこうようにつき

◆近世（安土・桃山時代）における主要な文化財及び関連施設

- ・ 忍藩割役名主御公用日記
- ・ 大田の高札場、大達原高札場

江戸から大宮郷に至る交通は、正丸峠越えの「吾野通り」、粥仁田峠越えの「河越通り」、熊谷から荒川沿いに入る「熊ヶ谷通り」の街道がある。「熊ヶ谷通り」は大宮郷から市内の荒川・大滝地区から雁坂峠を経て甲斐の甲州街道に続き、一般的に秩父往還といわれていた。

市内の関所は、甲斐への出入りを取り締まるため、栃本関あそと麻生加番所を設置し、幕府の管理下とした。江戸で観音信仰が盛んになると、秩父札所は信仰を集め、多くの巡礼者が秩父に訪れるようになる。これらの札所を巡るため巡礼道が整備され、現在でも道しるべや馬頭尊・庚申塔などの石碑類が数多く遺されており、当時の往来をしのばせている。

秩父の生業は、田畑の他に現金収入を見込める養蚕が盛んであった。重要文化財「内田家住宅」は秩父を代表する大規模養蚕農家である。

当時、上州桐生じょうしゅうきりゆうと並び秩父絹として隆盛を極め、各地に取引のための市が設けられた。特に大宮郷の妙見宮みょうけんぐう（秩父神社）に設けられた市は最大で、霜月（11月）1日から6日まで行われ、絹大市きぬのたかまちとよばれた。妙見宮の冬祭りとしての神事と「秩父夜祭」として知られている付祭りも行われたため、大いに賑わいを見せていた。忍藩も財政につながることからこれらを手厚く保護をした。

幕末になると飢饉と圧政による「世直し一揆」とよばれる打毀しが起き、幕藩体制の土台をゆさぶり、天明3年（1783）12月の大宮郷打毀し騒動、慶応2年（1866）6月秩父郡名栗村なぐりの一揆に端を発した武州世直し一揆ぶしゅうなどが起こり、混迷を呈していた。

◆近世（江戸時代）における主要な文化財及び関連施設

- ・ 秩父祭屋台に代表される、恒持屋台つねもち・田の沢屋台など

秩父型屋台の建造

- ・三峰信仰みつみね・・・三峯神社本殿（1661 創建）、
三峯神社日鑑
- ・萩平歌舞伎舞台はぎだいら（天保期）、坂東彦五郎ばんどうひごごろうの墓
- ・秩父吉田の龍勢りゅうせい
- ・長福寺芭蕉句碑ちようふくじばしやう



図 1-26 萩平歌舞伎舞台

3-5 近代

慶応3年（1867）大政奉還により明治政府が生まれると、明治4年（1871）7月の廃藩置県により秩父地域は忍県おし（荒川東岸）と岩鼻県いわはな（荒川西岸）に編入され、明治9年（1876）に現在の県域と同じ埼玉県となった。

明治期の主な事柄は、明治11年（1878）3月に447軒が焼失した秩父大火、明治17年（1884）の秩父事件があり、特に秩父事件は全国的に知られることとなった。当時、デフレ政策により生活を支えていた生糸の価格が大暴落、さらに地方税の増加が追い打ちをかけ、多くの人が高利貸しの借金に苦しんでいた。これらの人々の中から田代栄助たしろえいすけをはじめとした秩父困民党が結成され武力で訴えた。



図 1-27 秩父困民党会計長 井上传蔵の屋敷跡

養蚕・製糸産業は江戸時代以来盛んであったが、外国への輸出が増加すると輸出向けと内地用の商品の分化がおり、この内地用の生糸を先染めして織り上げたものが秩父銘仙として発展していった。

また、本庄駅ほんじやうの開設に合わせて、明治16年（1883）に本庄―児玉―秩父間を通じる「秩父新道」の開発が計画された。工事は秩父事件で一度中断するが、明治19年（1886）に道路は開通し、荒川には初代秩父橋が架けられた。しかし後に、流通の利便性向上などの観点から「秩父新道」は熊谷―秩父間という、現在の国道140号と同様のコースへ改修することが県議会にて提出・可決され、明治28年（1895）に竣工された。

明治15年（1882）、秩父を訪れた駐日フランス特命全権公使アルチュール・トリクーは、秩父神社の境内にあった大宮学校でのフランス式算術を使用した授業を参観し、校舎新築の話聞いて百円を寄附するとともに陸軍武官ボスキュー作成の校舎の設計図を寄贈した。これにより、明治16年（1883）にフランス風校舎の大宮学校が新たに建てられた。



図 1-28 秩父鉄道御花畑駅舎

大正期に入ると、大正3年（1914）に上武鉄道（秩父鉄道）が、熊谷―秩父で運転を開始し、大正6年（1917）になると影森まで鉄道が整備され、大正12年（1923）に秩父セメント株式会社が設立されると、セメントの輸送としての需要も多かった。

◆近代における主要な文化財及び関連施設

- ・旧大宮学校校舎（明治17年（1884））
- ・秩父橋（初代）
- ・旧秩父駅舎（大正3年（1914））

- ・秩父鉄道御花畑^{おはなばたけ}駅舎（大正6年（1917））
- ・吉田町立歴史民俗資料館（旧武毛^{ぶもう}銀行本店）（大正7年（1918））

3-6 現代

明治時代に発展した絹織物や大正時代に始まったセメントといった産業は、時代が昭和に移っても変わらずその中心であった。しかし、第二次世界大戦後の生活文化の変化や海外からの輸入品の増加により、徐々にその勢いを失っていった。

その一方、秩父市が河川の源流域に位置することもあり、各地でダム開発が進んだ。荒川上流に位置する大滝地域では、昭和36年（1961）に二瀬ダム、平成19年（2007）に滝沢ダムが建設された。荒川の支流域では、浦山川^{うらやまがわ}上流域で平成10年（1998）に浦山ダムが、吉田川^{よしだがわ}上流域で平成13年（2001）に小鹿野町との境に合角ダムが、それぞれ建設されている。

交通では、昭和5年（1930）には秩父鉄道が全線開通、昭和44年（1969）には西武鉄道が秩父へ延伸した。また、道路では昭和28年（1953）、前年の道路法改正により「秩父新道」が山梨県甲府市までのルートを含めて「国道140号」として認定された。県境に位置する雁坂峠とその前後区間はかつて登山道であったために「開かずの国道」とも呼ばれていたが、平成10年（1998）、秩父―山梨間を結ぶ約6.6kmの雁坂トンネルが開通した。こうしたことにより、県内の他地域や東京都・山梨県との交通の利便性が向上し、多くの観光客が秩父市を訪れるようになった。

この時期に、大滝地域では大きく2つの出来事があった。

1つは「国有林払い下げ訴訟」が挙げられる。明治政府の地租改正により誤って国有に編入された山林について、旧大滝村では明治30年（1897）に制定された国有土地森林原野下戻法に基づいて下戻を申請したが却下されたため、明治38年（1905）に行政訴訟を起こしていた。43年の長きに及んだ訴訟は、昭和22年（1947）に山林の一部を下戻す判決が下されたことにより、ようやく終結を迎えた。

もう1つは国立公園指定である。奥秩父の山林伐採を憂慮した有志により指定申請の気運が高まり、昭和17年（1942）に請願書を提出した。その後、太平洋戦争を挟んで政府による現地視察が行われ、昭和25年（1950）に16番目の国立公園である「秩父多摩国立公園」（現・「秩父多摩甲斐国立公園」）として指定された。

◆現代における主要な文化財及び関連施設

- ・旧埼玉県繊維工業試験場秩父支場（昭和5年（1930）～）
- ・秩父銘仙出張所（昭和時代初期）
- ・旧秩父市民俗博物館（昭和43年（1968）・現在は閉館）
- ・荒川歴史民俗資料館（昭和52年（1977））
- ・武甲山資料館（昭和54年（1979））
- ・大滝歴史民俗資料館（平成5年（1993））
- ・浦山歴史民俗資料館（平成12年（2000））



図 1-29 浦山ダム



図 1-30 昭和 58 年（1983）の秩父駅前